

## 白井勝美先生の退官にあたり

白井勝美先生は、昭和六十三年三月末日を以て定年退官を迎えられる。われわれ一同にとっては、惜別の情まことに切なるものがある。先生はその温厚な人柄に加えて、鋭くしかも公平無私の判断力をもって、社会科学系の同僚教官の厚い信頼を集めてこられた。昭和五十六年から二年間、先生は社会科学系長を勤められ名学系長の声が挙げたのは記憶に新しい。政治学専攻教官の間にあつては、終始最長老として、われわれの良き先輩教授、良き相談相手、加えて良き飲み仲間ともなつて下さつた。先生は常に笑顔をやさず、人に接するに控え目な姿勢を崩されず、後輩教官のびのびと自由に活動する雰囲気をつくられた。ここにわれわれ一同改めて深き謝意を表する次第である。

先生は昭和五十年四月に本学に着任されたが、この十三年という在任の時期は、筑波大学の形成と発展の時代でもあつた。初期には、荒野の真只中に体芸棟のみがぼつねんと立ち、その他の校舎は急ピッチの建造が進められていた。雨が降れば長靴が必需品になる泥濘と化し、筑波大学は物理的存在としてよりも、理念の中に存在していた。ついで、道路が舗装され、街路樹が植えられ、新しい大学の広大なキャンパスの全貌が現れた。この間、社会科学系の政治学専攻も、誠に遅々たるものではあつたが、小規模ながらそれなりにまとまりのある研究と教育の教官集団に、成長することができたのである。

先生は今さら言うまでもなく、日本外交史学界における最高権威の一人であり、緻密な実証主義の精神と鋭い論理

的分析力に基いて、多くの優れた研究業績を発表し続けてこられた。その中には、『日本外交年表並主要文書』上下(原書店、昭和三十年)、『日中戦争』(中公新書、昭和四十三年)、『日中外交史―北伐の時代』(瑞書房、昭和四十六年)、『日本と中国―大正時代』(原書房、昭和四十七年)、『満州事変』(中公新書、昭和四十九年)、『中国をめぐる近代日本の外交』(筑摩書房、昭和五十八年)などが含まれている。日本国際政治学会の理事を勤められるほか、アメリカの日本外交史の研究分野の学者たちとの共同研究も進められ、また、昭和六十二年の春から夏にかけては、北京に訪問教授として滞在され、日本外交史を講ぜられるなど、学外での活動は多岐にわたられている。本学での教育面では、先生は主として日本政治外交史に関連する講義を担当されたが、受講した学生たちは、先生のいわば時・分きざみともいふべき詳細で臨場感に溢れる講義に魅了されたといわれる。しかも、時には学生たちと痛飲して鶏鳴に及ぶこともあったという。本学にとって、先生の御退官による研究、教育面での損失を補うことは、容易ではない。

臼井先生は、大正十三年十一月四日に栃木市で出生された後、東京において成長され、旧制東京高等学校を経て、京都大学文学部史学科を卒業されている。その後、外務省外交史料館を研究者としての出発点とされた後、九州大学文学部教授を経て、筑波大学社会科学系教授となられ、今日を迎えられたのである。

本号は、先生の退官記念号として編集されたものであるが、先生の強い御希望によって、通常の退官記念号の形式をとらないこととなった。それに代って、先生の玉稿をいただき、さらにこの場所を借りて先生の研究業績、経歴の一端を略記させていただくことになった次第である。

臼井先生は、三月末日を以って筑波大学を去られることとなるが、長らくの御努力と御高配に感謝するとともに、今後とも親しき友人として、また学会の先輩であるとともに仲間として、末永い御友誼を賜わるようわれわれ一同御

願ひ申し上げたい。先生のこれからの御健勝と研究の増々の御発展を、切に願うものであります。

政治学教官代表

徳田教之  
三石善吉